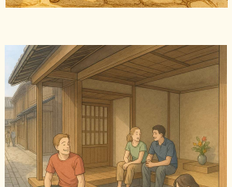
0.段縁法（だんえんほう）

複数の低い水平面を連続的に構成することで、「座る」「飾る」「歩く」「立ち止まる」など、用途を限定せずに人の行為をやわらかく誘発する和の建築手法。
こうした設計は、町家や茶室などに古くから見られるが、これらの部材には、縁側・床の間・犬走り・敷居などの名前があるものの、
“低く連なる水平面が、空間の使い方に多様な余白を生む”という用法そのものには、まだ名前がついていないと考えた。

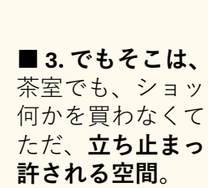
縁側

床の間

犬走り



敷居



1.問い直し：なぜ“段縁法”なのか？

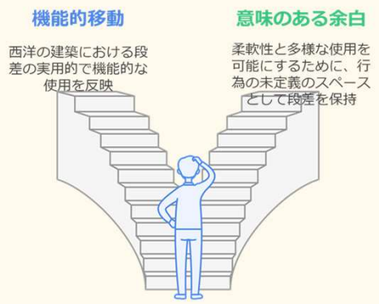
日本の伝統的な空間には、
「これは何をする場所なのか」と**一義的に定義されていない場**がたくさんある。
その代表が、縁側や床の間、敷居、犬走りといった“低い水平面”。
でも、これらはただの部材の集合ではない。
それらが**同じ高さ・異なる高さで連続していることで、人の行為に余白が生まれる。**
「ここに座ってもいいのかな？」「ここに物を置いていいのかな？」
そんな**さりげない“誘い”が空間に仕込まれている。**
これこそが、日本建築が持つ「名もなき設計的やさしさ」であり、我々が無意識に享受してきた“受動的な豊かさ”だと考える。

2.コンセプト：ふと“自分”に戻る空間

光地の喧騒から少し離れた路地裏に、ふと腰を下ろせる段差が続いている。誰かがそこに座っていたり、飾られた草花を見上げていたり、床に荷物を置いて旅の記録をつけていたり。そこは、何をしても、何もしなくてもいい空間だ。
私たちは日本建築において、縁側や床の間、敷居や犬走りといった低い段差を、無意識のうちに座る・飾る・立ち止まる場所として使ってきた。
しかしこれらが“連続して配置されることで行為の余白を生む”という設計的な用法には、いまだ名前がない。観光の合間にふと立ち寄り、自分の時間を取り戻す場所。行為を指示されず、ただ“してもいい”と感じられる空間。
そうした**和の設計的やさしさ＝余白のもてなし**を、段縁法という仕組みで表現した。

3. 西洋との比較：空間のふるまいも変わる。

西洋の建築における段差は、主に上下移動のために設計され、
その用途は明確で機能的である。
一方、和の空間において段差は、座る・置く・飾る・立ち止まるといった**行為の未定義な余白**として使われている。



4. 観光客にとっての需要

•段縁法は、行為の自由を許す“ゆるされた空間”をつくる
→ 何をしても、何もしなくてもいい空間
→ 日本建築にある「あいまいさの肯定」「非機能的な豊かさ」を体験として伝える
•観光地では、自由に座れる場所が意外と少ない
→ 歩き疲れても“座っていい場所”が見つかりにくい
→ 段縁法の空間は、街の中に自然に溶け込む“座ってもいい場所”になる
•その体験が、「和の空間はやさしい」という印象を残す
→ 言語や文化の壁があっても、身体で理解できる“やさしさ”
→ 観光地における「体験の質」をさりげなく高める

5.計画地：石川県金沢市ひがし茶屋街の細い路地沿い。複数か所に分散配置

【何をもたらすのか】

→観光客が休憩がてら「自分がどう感じているのか」に気づく

■ 1.「金沢らしさ」を期待して来たはずが、
•茶屋街は混雑しててにぎやか、
•町家カフェは行列、
•和の建築を「静かに感じる場所」は意外と少ない。

■ 2. そんな中で、
路地裏にふと開かれた空間に、
腰をかけている人の姿が見える。
中を覗くと人がくつろいでいる。
花が飾られている。展示か何かがある。
→ 観光地の“喧騒の外側”に、気取らない和の空間がある。
→ それだけで“入りたくなる”。

■ 3. でもそこは、
茶室でも、ショップでも、ギャラリーでもない。
何かを買わなくていい。情報も得なくていい。
ただ、**立ち止まっても、腰をかけても、しゃがんでも許される空間。**
→「これは何をする場所ですか？」って聞く必要がない。
→ “自分のために存在してるような余白”がある。

■ 4. そして、その場所で出会うのは
•どこにも書いていない小さな草花の展示
•地元の人が季節ごとに飾るしつらえ
•無名の段差が連なって生む、和のやさしさ
→「これが日本の建築なのか…」と、**身体で感じる“美しさ”を体験する**

6.行為を強いられない場所 ：段縁法が生む「してもいい」の空間

ベンチじゃないのに、座りたくなる
段縁法の高さは、何かを強制するものではなく、自然と身体が受け入れられる寸法でできている。
それが、“座ってもいい”という許可を空間から感じ取るきっかけになる。

ちょっときれいに、飾ってみたい
段縁の一角が、誰かの手によって草花のしつらえの場になる。
これは「展示空間」ではなく、「飾りたくなる空間」。
高さと奥行きがちょうどいいからこそ、自然に生まれる美しさのきっかけ。

ちょっと荷物を、置いてもいい
段縁の高さと広さは、荷物を置いたり手を休めたりするのにも心地いい。
「ここは置いちゃいけない場所じゃない」
そんな感覚が、自然と安心感を生む。

つい足を止めたくなる
入口にある草花のしつらえや、誰かが腰かけている姿。
そのさりげない気配に誘われて、ただ見るだけでも立ち止まりたくなる。
目的がなくても成立する、空間の余白。

姿勢を変えても、許される自由
腰かけ、膝にスケッチブックを置いて、ただ静かに描く時間。
周囲の誰もがそれを“違和感のない行為”として受け入れている。
段差の高さと空気のやわらかさが、創作への入り口になる。

町を、ぼんやり眺める
観光客として訪れた場所で、観光の途中で、
何かをするわけでもなく、ただ景色と空気を眺めていた時間。
その穏やかなひとときもまた、この空間が許してくれる行為のひとつ。